

一般社団法人

東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO. 52 (2025 年 8 月 31 日発行)

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発行：(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部
事務局：〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4
沖縄県立芸術大学音楽学部 小西研究室気付
<http://tog.a.la9.jp/okinawa/index.html>
MAIL: okinawashibu.toyo@gmail.com

【第 84 回定例研究会記録】

日時：2025 年 7 月 6 日（日）14:30～16:00

ハイブリッド開催：

沖縄県立芸術大学首里当蔵キャンパス一般教育棟
1 階 103 教室及び Zoom ミーティング

座談会

「沖縄支部例会の歩みを振り返って」

司会：小西潤子

進行兼登壇者：比嘉悦子

登壇者：金城厚、久万田晋、高江洲義寛

■ 沖縄支部の設立回顧／金城厚

沖縄支部は 1993 年に設置されたが、実質的には 1990 年の沖縄地区連絡会の設置から始まる。私は 1990 年、新設の沖縄県立芸大に赴任するにあたって、東京からも関西からも遠く離れた沖縄であっても、定期的に東洋の例会ができないかと考えた。沖縄には、もともと多くの会員がいたが、県立芸大の設立によって、多くの会員が移住してくるようになっていた。首都圏と関西を除けば、これだけ会員がいる地方都市はないので、私は東京と関西に加えて、ここ沖縄に日本のアジア音楽研究の第三極を作りたい、と考えた。

そこで、新しい企画の承認をめざして 3 つの配慮を考えた。①定款・定款施行細則をいじらないこと、②財政的に、学会に迷惑をかけないこと、③学会にとってもメリットがあること、である。

第 1 に、定款や定款施行細則変更の必要がない「沖縄地区連絡会」をやりたい、と申し出た。当時、学会には地区委員という制度があって、首都圏以外に住む主要な会員を指名していた。私は、沖縄の地区委員である高江洲義寛さんを中心に、沖縄在住会員が集まって情報交換する会、ということにして、1990 年 3 月の役員連絡会で「沖縄地区連絡会」という組織の立ち上げを提案した。これは 4 月の理事会で正式に承認された。

第 2 に、学会財政が苦しい折り、予算を貰うことには抵抗があったので、非会員の聴衆から参加費を徴収することにした。沖縄は、学会や講演会に一般県民が気軽に足を運ぶ土地柄なので、非会員の参加がかなり期待できたからである。これについても、特段の異議なく了解された。

第 3 に、学会全体にとってのメリットとして、定期的に大会を引き受けることを宣言した。当時は首都圏と関西とで 1 年ごとに交互に大会を開催する習わしだったが、理事会は毎年、開催校探しに四苦八苦してした。そこで、ここに割り込んで、8 年サイクルで、首都圏 4 回、関西 2 回、沖縄 1

回、その他の地方1回というローテーションでどうか、と提案したら、理事会は大喜びで、連絡会の新設を許可してくれた。

沖縄側としては、全国の会員が沖縄まで足を運んでくれることにより、新設の沖縄県立芸大の存在を全国に知らしめることができる、と考えた。連絡会発足後3年の1993年12月に、沖縄県立芸大で初めて大会を開いた。

文字通りの「沖縄支部」の発足には数年を要した。1992年4月の役員連絡会に、支部新設の検討を提案した。地区連絡会としての活動実績があったので、問題なく了承された。その結果、92年秋の平成4年度通常総会で規約改正が決定し、平成5年度、すなわち93年9月をもって、正式に「沖縄支部」が発足した。

■設立当初の例会様子について／高江洲義寛

私は、東京時代の1960年から1980年頃は東京で沖縄民謡を歌う「ゆうな合唱団」を組織して新宿文化センターなどで琉球舞踊を取り入れた発表会などやっていました。歌唱指導のテキストがないため、沖縄のわらべうたや沖縄民謡のテキストを自費出版しました。

それに目をつけていただいた音楽学者が山内盛彬先生で、早速ご自宅に呼ばれたのをきっかけに琉球王府オモロなどに触れる機会となりました。

私がまだ学生時代の頃。世界的民族音楽学者小泉文夫先生が毎週NHKラジオで世界の民族音楽を流しておられるから市ヶ谷で行われた講習会にも参加させていただきました。

そのご縁から私が沖縄のわらべうたをどのように分類したら良いか悩んでいるところ、丁度、東京芸大の小泉ゼミでは東京のわらべうた取材の集大成を行う時期と知り早速参加させていただきました。

学生時代から東京から沖縄の島々の音楽調査をしていましたが、ある時、九学会が琉球列島を総合調査する時期がありました。私も自分の故郷にとってまたとないチャンスだと知って積極的に参加。八重山石垣島宮良の現地調査に日本の民俗学会の重鎮の先生方に混じって音楽や民俗の調査を

しました。

東洋音楽学会からは田邊秀雄先生や本田安次先生、小島美子先生らが参加され、深く記録されていました。

そのご縁で行き帰りに、将来は沖縄にも東洋音楽学会の支部を設けるべきだと言う話しも正式ではありませんがありました。

その頃、比嘉悦子さんがハワイ大学で民族音楽から卒論を出す計画で沖縄へいらしたので、那覇市松尾にあった照喜名朝一さん宅をご紹介したりしていました。

又、東京芸大の小泉ゼミは沖縄音楽に強い関心を持って、数年がかりで国頭村安田をはじめ与那や名護地区の古謡を根気良く調査して教育委員会から合同記録を出版もしていて、これから役立つ貴重な資料となるでしょう。

私の沖縄音楽での調査の中心は全島のわらべうたと祭祀音楽の古謡と山内盛彬先生から伝授する首里王府オモロ、ウムイ、キューナに路次楽、御座楽など。

エイサーはじめ祭祀音楽は珍しく興味深く、宮古島のウヤガン祭りはじめ久高島のイザイホーは二度も体験したのは、優秀な写真家比嘉康雄さんがいたからでした。

さて、肝心の東洋音楽学会はいつどのように成立したかは先ほどの金城厚先生のご報告をご参考にさせていただきたいです。

私は第一回東洋音楽学会にメインの発表をしたようです。今でも、発表の時のことを忘れないのは、琉球漫談家、沖縄音楽研究家で、《りんけんバンド》の父、照屋林助さんを学会発表にお呼びして沖縄三線の曲弾きまで披露していただき会場からは喝采を浴びたからです。

1971年の復帰直前の年に。私は10年来念願の企画、「沖縄伝統芸能センター」の県公式な創立を当時の屋良朝苗知事に直訴しました。琉球古典芸能の重鎮真境名由康先生を先頭に当間一郎さんと私が事務局長として沖縄県庁へ出かけました。

当時の屋良知事曰く。「今県の第一義はどうやって復帰するかで大変な時期です。皆様のこの思いも大事な事業なので復帰した暁には第一に進め

て行きたい」と一括で断られた時はガッカリしました。

今もって残念ながら沖縄芸能の資料館はありません。今やAI時代、IT科を県芸大にも早めに創立して下さい。デジタル化を基に貴重な録音録画を後世に遺す重大な責務を皆様真剣にお考えいただきたい。

■これまでの支部例会について／久万田晋

東洋音楽学会沖縄支部例会の記録については、『東洋音楽学会沖縄地区通信・沖縄支部通信集 1991年～2001年 No.1～28』（東洋音楽学会沖縄支部、2001年）が発行されている。それ以降は『東洋音楽学会 創立80周年記念 記録集3 支部例会・定例研究会篇（1959年～2018年）』（一般社団法人東洋音楽学会、2018年）に沖縄支部の例会記録が掲載されている（一部欠落あり）。2018年以降については、沖縄支部ホームページを参照していただきたい。

例会の内容をおおよそ10年毎に区切って集計してみると、表1、表2のようになる。ジャンル別（表1）に見ると、沖縄の伝統音楽・芸能に関する内容が多いのは当然であるが、日本本土、中国、インドネシア、南洋・ハワイなどアジア太平洋諸地域の研究も盛んに取り組まれていることがわかる。また支部会員の異動による研究対象地域の推移も確認できる。発表形式別に見ると（表2）、1990年代は研究発表が非常に活発だった。また非会員による講演も積極的に行われた。2000～2009年代には、卒論・修論・博論発表が増加しており、冲芸大を中心とした学生が支部例会を通じて研究者として成長してゆく過程を確認できる。演奏を含むワークショップは全期間において取り組まれており、最近まで増加傾向にある。

支部という枠組みが解消される今後、これまでの実績を認識しつつ今後の沖縄を含むアジア太平洋地域の音楽芸能研究の方向性を探ってゆくべきだと考える。

表1 沖縄支部例会集計（ジャンル別）

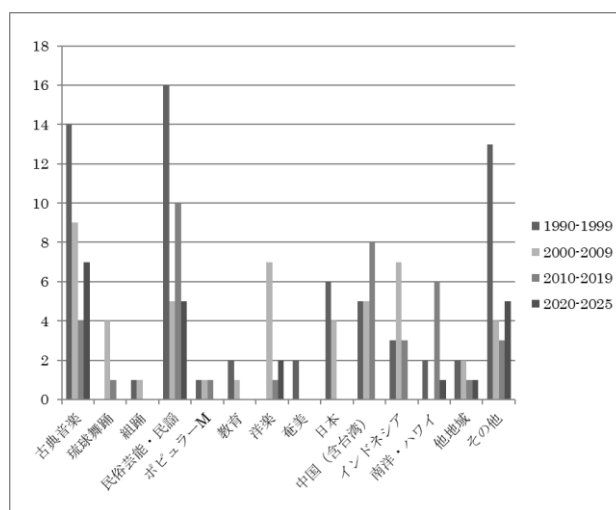
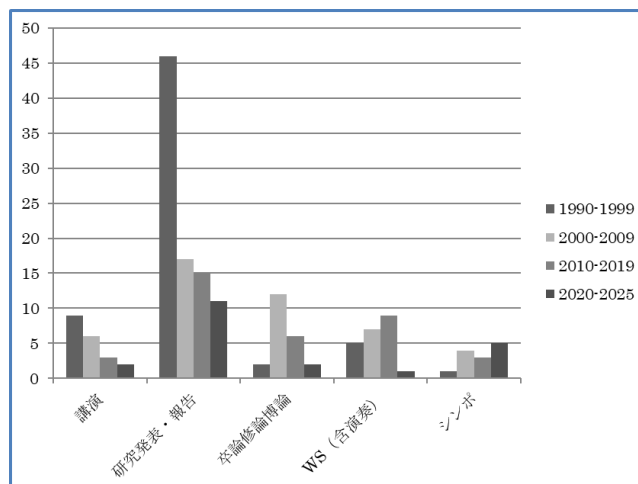


表2 沖縄支部例会集計（発表形式別）



■沖縄支部が沖縄で果たしてきた役割について／比嘉悦子

私は大学院を修了して1977年に沖縄に戻って来ましたが、ハワイ大学の特任教授として度々「日本音楽」の講義をなさっていた岸辺成雄先生の通訳をしたりして親しくして頂いていた関係で、帰国後すぐに東洋音楽学会の会員になりました。年一回の総会及び研究発表大会には毎年ではありませんが、東京まででかけて参加していましたし、関西支部例会に参加して箏曲家の根路銘ノブ先生と「琉球箏曲について」の共同研究発表もしました。

当時、沖縄には沖縄芸能史研究会という文学や芸能関係の研究家たちが集って舞踊や組踊、琉球

古典音楽、時には民俗芸能などの研究発表をする研究会があり、私はその研究会に属して研究発表などを行っていました。しかし 1990 年、沖縄県立芸術大学に音楽学部が設置され、金城厚先生たちの尽力で東洋音楽学会沖縄支部が発足してから支部例会に毎回の如く参加して研究発表も行いました。

1990 年当時、私は市町村史における伝承歌謡の調査と執筆を依頼されていたので、宜野湾市、浦添市、西原町、沖縄市の各自治会を訪ねて明治生まれのお年寄りから沢山の民謡及び歌謡を聞き取りました。また、それと並行して各地の年中行事や祭り、芸能の調査にも加わり、祭祀の中で歌われるオモロやクエーナ、綱引き歌や三月アシビの歌謡などの調査報告書などをまとめていました。1992 年 2 月 29 日の第 5 回定例研究会では「フェーヌシマ芸能の音楽」について、1993 年 2 月 20 日の第 8 回定例研究会では「宜野湾、浦添の三月遊び（サングウチャー）」の研究発表、1996 年 2 月 24 日の第 16 回定例研究会では「CD『祈り―勝連町平安名の歌謡』の製作に携わって」という報告も行っています。

東洋音楽学会沖縄支部は沖縄県立芸術大学の先生方、学生たちの研究発表の場でもありましたが、私たち野の研究者、古典芸能の実演家などにも研究発表の機会を与え、沖縄の芸能研究者と実演家の方々が身近で研究成果を発表し、意見交換が行われた貴重な場でした。また、中国やタイ、インドネシア等のアジア音楽を研究する若い音楽研究家の育つ場ともなっていて、沖縄支部が果たした役割は多大なものであったと思います。

【傍聴記】

現行の支部制度のもとで行われた最後の沖縄支部定例研究会は「沖縄支部例会の歩みを振り返って」というテーマのもとに、長年にわたって沖縄支部の運営に携わってこられた金城厚、高江洲義寛、久万田晋、比嘉悦子の 4 氏を登壇者として、前半に沖縄支部の設立からこれまでの歩み、後半にこれから（現行支部制度解消後）の在り方という二部構成で行われた。

前半では先ず金城厚氏から支部設立の経緯についての詳しい説明があり、1993 年 9 月に沖縄支部が発足する以前の 1990 年に、沖縄県立芸術大学音楽学部が開設されたことに伴い、東京、関西に次ぐアジアの音楽研究の第三極として、沖縄地区で例会を行うことを企図し、理事会の承認を経て沖縄地区連絡会を新設し、同年 10 月に例会を開始したこと、その際に学会に財政的な負担をかけないように、非会員から参加費を徴収することにしたこと、学会全体にもメリットがあるように、8 年に 1 回沖縄地区で大会を開くことを決めたことなどが報告された。続いて高江洲氏からは、沖縄地区における学会活動が諸方面から期待されていた支部設立当時の機運について、ご自身の体験にもとづく報告がなされ、久万田氏からは学会創立 80 周年記念に作成した記録集にもとづいて、沖縄地区例会・支部例会の発表の傾向の推移が詳しく報告され、比嘉氏からは沖縄支部が沖縄で果たしてきた役割について、ご自身が行ってきた沖縄のフィールドワークと市史の編纂のことが報告された。前半の最後には蒲生美津子氏、大塚梓子氏からのメッセージも紹介された。

東京在住の筆者は沖縄支部例会に参加する機会とはほとんどなかったが、1993 年の支部発足を記念して行われた第 44 回大会の際に本部の参事として大会実行委員を仰せつかったことから、同年の 6 月に実行委員会に出席するためにはじめて沖縄を訪れたことや台風を避けて 12 月に行われた大会のことなどを懐かしく思い出しながら拝聴した。

後半では、最初に小西潤子支部長より今回の支部制度の解消は現状に即した発展的解消であること、今後も沖縄では例会を年 1 回開催予定であること、新たな制度ではこれまで例会を行っていなかった地域での例会の開催も考えていることなどの説明があり、その後、各登壇者から提言がなされた。4 人の登壇者が異口同音に指摘していたのは対面例会の重要性であった。そのほかには、本質的なテーマを設定して行ってほしいとの提言、学会の間口が狭くなっているのではないかと懸念、他学会との連携の重要性などが指摘された。

質疑では会場から支部例会が解消されることで

若手が気軽に発表できる機会が少なくなることに対する懸念が示されたが、それに対しては若手が発表しやすい環境を作ることが重要である旨の回答があった。

今回の現行支部制度の解消は、オンライン例会の急速な普及や会員減の現状に対応するものであるが、登壇者の指摘にもあった対面例会をどのように位置付けていくかは学会全体の大きな課題であろう。本学会の目的は定款第4条に「東洋音楽に関する研究発表、および連絡、知識の交換、情報の提供等を行なう場となることにより、東洋音楽に関する研究の進歩普及を図り、もってわが国における学術の発展に寄与すること」とあり、学会の事業は第5条に「研究発表会」「学術講演会」や「関連学協会との連絡および協力」「研究および調査」等を掲げ、それらは「日本全国において行うとともに海外との学術交流を通じて行う。」と明記されている。大会のみならず、実地で行う対面例会についても、こうした定款の趣旨に今一度思いを致すことも必要のように思われた。沖縄は1990年10月の第1回沖縄地区定例研究会以来、一県で84回に及ぶ定例研究会を開催するとともに、沖縄の音楽や芸能の研究を深めてきた実績がある。旧来の支部の壁を取り払った新たな体制では、これまで例会を行っていなかった地域でも対面例会を開くことが構想されているが、沖縄は今後も地域からの発信の先導的な役割を担っていくことを期待している。(遠藤 徹)



(写真：座談会の様子)

支部廃止に伴う今後の例会のご案内について

令和7年度の定例研究会の概要についてお知らせいたします。

令和6年度をもって廃止される支部委員会に代わり、各支部委員会を統合して研究企画委員会を設置し、例会の企画運営をおこないます。委員会内に地区ごと（東日本・西日本・沖縄）の部会を設置して、地区を超えた情報の共有と交流に努めつつ、各支部が築いてきた地域のネットワークを生かした開催をある程度維持してまいります。

例会の告知は、メーリングリストと学会ウェブサイトを中心におこないます。例会報告については会報および学会ウェブサイトへの掲載を予定しています。対面・オンライン・ハイブリッド等の開催形態については、対面での緊密な議論およびオンラインによる多くの会員の交流の可能性を考慮しつつ、実情に応じてその都度決定します。

1年度中の例会開催回数は10回以上として、3回程度を3地区合同、7回程度を各地区担当（東日本3回、西日本3回、沖縄1回程度）で開催する予定です。ただし、令和7年度は大会が沖縄で開催されるため、沖縄地区での例会はありません。例会開催回数は新たに第1回から数えることとし、東日本が担当して9月27日に開催する例会を「第1回定例研究会」といたします。

10月（西日本担当）、1月（東日本担当）と順次例会を企画いたします。例会の発表申し込み、企画の提案については、下記にお送りください。

Mail: toyo-kki@googlegroups.com

例会は、学会の研究活動の重要な柱の1つです。会員の皆さまが進めている研究プロジェクトに基づく企画、地区を横断する企画、実演をともなう企画、特定の地域に根ざした企画など、会員の皆さまからの積極的な例会企画の提案をお願いいたします。これまで例会が開催されてこなかった地方での開催を実現するため、運営の補助要員を派遣することも検討しています。ご希望がある場合はご相談ください。

(研究企画委員長 福岡正太)

■第1回定例研究会のお知らせ（東日本担当）

日時：2025年9月27日(土)14:00-17:00

開催場所：国際基督教大学 D 館オーデトリウム

【第一部 研究発表】

1. 「一節切の世界」

相良保之(古典尺八研究・明暗真法流尺八演奏家)

2. 「能役者の吹奏した一節切」

高桑いづみ(独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所)

3. 「一節切尺八の調子について-林羅山の「餘音尺八記」の一考察」

マット・ギラン(国際基督教大学)

【第二部 一節切演奏】

出演者：

泉武夫、大山貴善、加藤いつみ、マット・ギラン、
相良保之、島津義秀、弾真空、ニック・ベランド

【第三部 特別企画「一節切尺八 日本中世の響」】

小濱明人（一節切・尺八）

河野祐紀（狂言師・朗読）

司会 マット・ギラン

共催：国際基督教大学、一節切尺八〈大森宗勲没
400周年祭〉実行委員会

（一社）東洋音楽学会 沖縄支部通信 No. 52 編集委員
遠藤美奈、鈴木杜萌、高瀬澄子、
多和田真理、塚原健太